

手紙が語る戦争の悲劇

「女性の日記から学ぶ会」が刊行

戦地に赴いた父親が家族にしたためた手紙、少女の慰問手紙に対する兵士の返書…。『女性の日記から学ぶ会』(事務局・千葉県八千代市)が、先の大戦中に書かれた手紙を読み解き、「手紙が語る戦争」(みずのわ出版)として刊行した。戦争の悲劇や家族のきずなを見つめ直すきっかけになっている。

「父と母の対話ができた。むきようたい7人全員でした」。6月、八千代の名前を書き、「どうして開かれた出版記念集の約100人の参加者のために遠い南の方へ行くことになりました」を前に、本の執筆者の一人、長野市のカーデンコ「下の子は兄ちゃんを敬い、みんなで仲良く暮らして下さい。おとうさんはそれが何よりうれしい。父親が戦地に向かったは、見知らずの兵士に

胸を打つ家族への思い

次代への継承に有効

のは1944年、唐沢さん6歳のとき。南方戦線に向かう輸送船が撃沈され、戦死した。3年前、家の土蔵を整理していた、戦地に送られた父親が最初に泊まった宿でつづった便せん5枚の手紙を見つけた。1枚には唐沢さんを含

やまざわ 唐沢さん

親の手紙。唐沢さんは「家族を想う心情に、心が震えて涙が止まらなかった。本に手紙の写真を

も掲載、「父親の形見が世の中の役に立つなら、こんなうれしいことはない」と言う。前橋市の伊藤伸子さんは、見知らずの兵士に送った手紙については、戦争を知らない世代の同会メンバーが執筆を担当。その一人で八千代市の元教師、片岡良美さんは「手紙は相手に伝えたい思いがストレートに表現されており、読み手に突き刺さってくる」と手紙を語る。



「手紙が語る戦争」の表紙



「手紙が語る戦争」の執筆者たち。右から2人目が唐沢さん、左端が島さん



出版記念集会で、慰問手紙への返書など、戦時中の手紙を紹介するパネルの前に立つ伊藤さん(千葉県八千代市の八千代台東南公共センター)

持主が他界してしまった。本ではほかに、戦死する直前に家族への思いを細かな字でびっしり書いたはがきや、疎開先から東京の両親にあてた手紙などを取り上げた。96年結成の「女性の日記から学ぶ会」では、全国にいる約2500人の会員が、主に明治から昭和を生きた女性の日記を読み込んでいく。徐々に日記だけでなく手紙も集まるようになり、70歳を超える女性が戦死した父親の手紙を読んで「ようやく大人になった気がする」と感激するなど、反響が大きかったため、戦時中の手紙を特集することになった。

代表の島利栄子さんは「戦争体験が時間とともに風化するのを残念な試験。でも、手紙の読み解きは、継承するための有効な手段です」と話している。

斜面

「とうちゃんはいよいよお国のために遠い遠い南の方へ行くことになりました」

。7人の子供たちにあてた手紙である。祖母を大事にし、母の言い分けを守り、よく手伝うように諭している。書いたのは上伊那郡から1944年に出征した唐沢義男さん。手紙を書いた翌月戦死した。次男の亮治さんが美家の土蔵から62年ぶりに見つけ、最近刊行された「手紙が語る戦争」(女性の日記から学ぶ会編、みずのわ出版)で、いきさつを紹介している。◆父親が乗っていた輸送船「信濃丸」が撃沈されたと亮治さんは信じていた。2005年になって、信濃丸は撃沈されず戦後は引き揚げ船として活躍したと知る。調査を重ね、父を乗せて沈んだ輸送船の名を突き止める。07年に父の軌跡を小冊子にまとめた◆「手紙が語る戦争」には、疎開先から父母への手紙、戦地の夫へ書き送った妻の思いなども載る。青年団活動で戦地の兵に慰問文を送り文通も続いた。そのはがきを保管している女性も登場する。昨年と今年は、手紙展も開かれた◆「女性の日記から学ぶ会」の代表は、東筑摩郡筑北村出身で、千葉県八千代市の島利栄子さん。戦時下に残された手紙があなたのそばで眠っています。見つけてあげてと呼びかけてきた。あれから64回目の夏が巡ってくる。埋もれた手紙に光を当てれば、今もなお多くのことを語りかけてくるだろう。

手紙が語る戦争

女性の日記から学ぶ会 編

島 利栄子 監修



戦時下、庶民の実像に迫る

